四季録

さくら

光溢れるぬくもりの春。自然の勢いに気圧される春。そんなときワッと咲くのが染井吉野だ。

幕末に売り出した新参種がニョキニョキと日本中に増殖し続ける。悠々と時間をかけて大木になるでもなく、成長早く寿命短し。ひ弱な現代っ子？　すべてクローン樹というのも何だか落ち着かない。天気予報だってソメイヨシノ前線とは言わず、桜前線。サクラ＝ソメイヨシノ、国民総ファンの花となった。

否が応にも目を引く花には違いない。たかが人の一生ほどしか生きないこの木の大人気を思うにつけ、影薄い〝もののあわれ〟が現代人の無意識の内に彷徨しているのでは、などと頭をもたげるのは穿ち過ぎか。パッと咲いてサッと散る。その儚さ、潔さに日本人の美意識がくすぐられてきたのは確かだろう。

ある時代では精神主義に結びつけられたり、また喜びごとの象徴的な役割も果たしてきた。文人たちもこの木に生と死を見、イマジネーションを膨らますのはやぶさかではなかった。しかしそれは昔のこと。ソメイヨシノの神秘性はもはや消えて、ポップな存在となった。

他では知らないが、街中の公園などで見かける花見の宴も変容した。モクモクと焼き肉の煙が花を覆い、匂いを撒き散らし、残った油水は根元に垂れ流す。このときばかりはソメイヨシノも哀れに見えてくる。

かつてのお花見と言えば、日常を持ち込まないハレの日であった。めかし込み、提げ重箱に心づくしの料理を詰め、燗酒のための銅壺や炭まで持ち行き、はしゃぎながらも行儀と品を兼ね備えたものだった。そんな風情は消え、人が自然界の頂点に君臨すると考えがちな中国人やフランス人のように、桜を征服したかのような振る舞いになった。

いつのころからか定着した、全国似たり寄ったりのイベントという名の元に蔓延した催し。花見も祭りも美術展もイベント風装いに取り込まれてゆく。屈託ない空騒ぎと思えばそれですむが、何であれ、世の中一辺倒に流れては薄ら寒い。

春の陽気に誘われたか、天邪鬼がムクムクと、せっかくの花見シーズンに水を差すようなことを書いてしまった。だが僕とて無視はできないこの花。ソメイヨシノの魔力が密かに巣くっているのかもしれない。

折しもコロナ騒動でざわめき縮む日々。いつもの花見とはなりにくい今、薄く霞む山桜でも仰ぎ、静かに愛でるのはどうだろう。

僕の住む宇和島周辺などは、それはそれは見事。青紫にけぶる山にホッホッと桜色。どこかへ出かけずとも、このさりげなくも華やかな山桜を眺めるだけで、十分に春はくる。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/04/05 面名:文化 ページ:018
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。